

平成30年度 大学院短期招聘研究員の研究活動報告

招 聘 者：文学研究科 教授 久野マリ子

招聘研究員：リュブリャナ大学 名誉教授 ベケシュ・アンドレイ

招 聘 期 間：平成30年11月25日（日）～平成30年12月25日（火）

学術交流報告①：意義

実施日時：平成30年11月29日（木）

実施場所：國學院大學大学院若木タワー11階1104研究室コミュニケーションにおける状況と言語の諸側面との関わりを明確に表すモデルに関する議論、東欧における東アジア研究の重要性と専門性の高い日本研究の重要性について。

参加対象：久野研究室大学院生

概 要：中級・上級の日本語の学習者が教科書から「生」の日本語文章に移ることが日本語学習において重要な一步である。招聘期間中の私の研究の主な目的は、読解教育の原点であるこの一步を効率よく行うためにジャンルという観点から取り組むことが有用性かどうかの究明である。その前提は、学習者が様々なジャンルの特徴を事前に把握すれば、その分読むこともやりやすくなるということである。ジャンルは、コミュニケーション行為がどのような社会的文脈で行われるかということと深く関わっている。そのために、コミュニケーションにおける状況と言語の諸側面との関わりを明確に表すモデルが不可欠である。従って、招聘期間中の研究の一方向は、コミュニケーションにおける状況と言語との関わりを表すモデルおよびそのモデルにおけるジャンルの位置づけというである。そしてもう一つの方向は、ジャンルの言語的指標についての研究という方向である。

・大学院生のゼミとは直接的な研究の関係はないが、ベケシュ博士の先行研究で明らかになったモダリティとジャンルとの関わりを的を絞り、現代語における関わりをより深く理解するために、モダリティとジャンルの関係について、ベケシュ博士の希望で本学大学院教授小田勝教授の古典文法の講義、そして本学大学院兼任講師小柳智一教授の日本語研究史関連の講義を聴講した。このような、本学大学院教員との研究上の交流は意義深いものであった。

講演会等②：

実施日時：平成30年12月20日14：30～17：00

実施場所：130周年記念5号館5302教室

タイトル：他の漢字諸国における表記改革からみた日本語表記改革

参加対象：國學院大學大学生、同院生、研究に興味のある方一般

概要：・招聘期間中の研究活動の一環として、國學院大學文学部講演会（2018.1.20）で「他の漢字圏諸国における表記改革から見た日本語表記改革」というテーマについて発表した。テーマの選定は、一般の学部学生の興味に合わせて日本語学習者に、漢字仮名交じり表記を説明する時、それが現代社会のなかでいかに保持されたかについての講演である。

現在、漢字の発祥地である中国以外、漢字を国家語の表記体系の一部として使い続けているのは日本だけである。歴史的に関係も深く漢字文化が日本より深く入り込んでいたにも関わらず、漢字が表記の一部として使われていた韓国・朝鮮語では、現在、表音文字のハングルのみを使うようになっている。同様にベトナムでも、かつては、ベトナム語を書き表すために用いられていた漢字を含む表語文字のチュノムを廃止し、現在ではローマ字表記のクオック・ゲーのみが用いられるようになっている。このような中国以外の漢字文化圏の表記改革が、各国によって何故異なっているのか、異なる方向へ進んだかという問題について考えてみるならば、一つの仮説がある。

日本と異なり、それぞれ表音文字に切り替えた韓国・朝鮮民主主義人民共和国およびベトナムは両方とも19世紀の半ばか後半から植民地となった経験を共有し、自らの努力で近代化を進めることが不可能であった。この点が日本と異なる。その結果、母語の文字による教育が立ち後れ、漢字が一部の知識人だけのものとなり識字率を高めることができなかった。独立後、識字率をあげるために、漢字よりも学習しやすい表音文字を選んだ。一方、日本はそのような経験がなかったので、江戸時代にさかのぼる基礎的教育の伝統に基づき、漢字を重視するとともに独自の都合により、様々な他の試みがあったにも関わらず、漢字仮名まじりスタイルを保持する国語政策を取ることができたと考えられる。

講演会は、5302教室が満員となり立ち見が出るほどの盛況であった。また、本学以外の外部からの大学教員、大学院生も参加し、熱心な質疑応答が行われた。

学術交流報告ゼミナール③：

実施日時：平成30年12月6日（木）

実施場所：國學院大學大学院若木タワー5階0508演習室

タイトル：コミュニケーションにおける状況の文脈再考

参加対象：久野研究室受講大学院生

概要：・モダリティとジャンルの関係の、コミュニケーションにおける状況の文脈で

の位置づけがまず必要である。『國學院大學雑誌』119-11号に発表した論文の内容をさらに発展させ、コミュニケーションにおける状況の文脈の新たなモデルについての一部の研究成果を、「コミュニケーションにおける状況の文脈再考」という題で、2019.12. 06に久野マリ子教授のゼミで発表した。

言語の捉え方において、チョムスキーの理想的母語話者は完全に社会的・文化的文脈文脈抜きで理想的なモデルである。一方、ソシユールは言語を話者共同体が共有しているとして考えたが、具体的には、「話し合っている頭たち（les têtes parlantes）の伝達モデルで、当事者だけを考察の対象としている。このような立場では、言語の具体的な状況における振る舞い方の完全な説明が不可能である。一方、ハリデー（Halliday）はの状況の文脈モデルにおいて、コミュニケーションの体系としての側面において、話者共同体に属し、体系としての文化的文脈、およびその下位に位置する体系としての言語をもうけている。具体的な状況の文脈で行われている各々の文化行為及び発話行為は体系としての側面の事例化である。ハリデーのものである、体系としての側面は理論化・抽象化の到達点として捉えられている。モデルの体系的側面と個別的側面の具体的な関係は明確ではない。このギャップを埋めることができるのは、ブルディュー（Bourdieu）が提唱しているハビトゥス（habitus）という概念である。ビトゥスとは、社会化において獲得された一連の振る舞いの傾向であり、行為者を特定の行動および反応に体系的に且つ無意識的に傾けている個人個人の身体的記憶である。従って、共同体における社会化を通じて獲得されたビトゥスが個別的側面における各々の行為者の具体的な社会行為・発話行為を司る個人レベルの体系であり、共同体の集団的・体系的側面と各々の行為者の個別的・具体的側面を結ぶ要因であると考えられる。本講義の内容は、ベケシュ博士の最新の理論であるところの、モダリティとジャンルに関するもので、コミュニケーションにおける状況の文脈での位置づけがまず必要であると説く。コミュニケーションにおける状況の文脈の新たなモデルについての一部の研究成果を、「コミュニケーションにおける状況の文脈再」という題で、ソシユール、チョムスキーの言語モデル以降のコミュニケーションモデルにおける重要な成果は、コミュニケーションの体系としての側面において、話者共同体の側面だけでなく、各々の個人のハビトゥスという側面も重要であるということ強く主張するのがベケシュ氏の意見である。

学術交流報告ゼミ④：

実施日時：平成30年12月13日（木）

実施場所：國學院大學大学院若木タワー 5階508

タイトル：スロヴェニアにおける高等教育の現場での日本語教育の現状

参加対象：久野研究室受講大学院生

概要：日本ではあまり知られていない、東ヨーロッパの小国である日本と異なり、共和国が、なぜ東アジア研究を重要視するのかについてその意義についての説明があった。さらにスロヴェニアの歴史や、EUを中心とする中で旧ユーゴスラビア諸国における日本研究・日本語教育の歴史および現在の状況について「スロヴェニア、及び旧ユーゴ諸国における日本語教育と日本語研究」という題して講義が行われた。東ヨーロッパ及びヨーロッパの主な大学教育での日本研究では古典研究が重視され、日本語教育は軽んじられていたが、スロヴェニア大学文学部アジアアフリカ学科では高度な日本研究を行うために、専門書や文献は日本語で読むことが必要であるために、日本語読解教育に力を入れているという紹介がなされた。

学術交流報告その他：

・「課程博士提出論文：首都圏方言と共通語の境界に関する研究－」の学力確認の場に特別にご出席いただき、日本語教育の現場においてコミュニケーションの現状と言語の関わりについて有力なコメントを頂いた。

・ベケシュ博士ご本人による今回の短期招聘で得られた研究の知見としては次のような点が挙げられている。

・ジャンルに関連して、日本語教育において学習者の読解へのモチベーションを高めるジャンルとして大きな可能性を持っている民話というジャンルに着目し、そのジャンルの特徴を究明した。研究の成果の一部は、青山学院大学で開催されていた国際シンポジウム「ことばの身体性」(2018.12. 08～09)で、「日本とスロヴェニアの民話」という題で発表した。重要な成果として日本とスロヴェニアの民話がジャンルの特徴において共通点が多いということで、スロヴェニア語母語話者にとっては日本語で書かれた民話も分かりやすいジャンルであろうということである。

・日本語の読解教育への応用の可能性から見て、モダリティと主題の関係に基づいたジャンルの特徴の究明は、対象を学習者および留学生にとってもっとも重要なジャンルであると思われる。そのため、報道文、論説文、そして学術論文に限定して読解教育を行った。研究が途中半ばなので、結果はいまだ未発表である。ここで分かったのは、モダリティと主題から見たそれぞれのジャンルの基本的な特徴が、文副詞の分布、文副詞と文末表現との関わり方など、文段（パラグラフ）レベルの主題の明示的な提示などにおいての違いとして、明確に現れるということである